

おちくぼ  
夏

W  
913.35  
O  
4-2









ありきい千二の文をてまつるむよきわ  
 ちてあわくよきうよへやう戸あふはわ  
 ーとたふサ倍とそちわきとハナウわすい  
 下んとたもるふ戒いんよかる也もみうな  
 たりよふとあはれよハナウあすもふす  
 ちよハナウよ心まよる候もる神さあめ  
 見せんともふほとくう祿く心あくなん  
 たりもるハナウひー女なえんわう女  
 作らもるもてきこるまよかくもこめわをれ  
 えあままうくちちわうあふれよてあま





とはうまにたがすむなをわらふ世なるとう  
 りかへるむてなく日乃くまきまひうて  
 ぞうたまつゝむよかふ女侍のあはれ  
 めえするよと夜うきんくろなきまきよて  
 るれぬがよにわう方へわうすかおきてい  
 おりてこまき今ぬいふといへて心ちなん  
 とあはれすあうたれてこまきあはれす  
 三毛へやとわてこせ奉るむかやううま  
 ぶむよてうあはれかきなわらふよそあは  
 へて後よきもてんとむくてあはれよあは

くまきよとたきおわてめふおこまへわうす  
 あまよわと見てまきわう三毛君よみてい  
 きよそくろあうてなんこまきわうわら  
 をほいさむまたぞうたまはるくあはれく  
 きみよきよたまつて給なといへてよう成  
 候いよつてまきよわらふもわてふなもあ  
 かなまきよわらふよまきついでてむと思  
 よあくちわひててうせよといきよまか  
 屋うしつてあはれよあまよかまわな  
 丁わ筆もなわらわあまよまきよまき



しつとくかくかきこわ

人二色位あふ心しつとく

無とつなくきこわたが

こねむもあふわとつとわわわ方いき  
ありつるあつろいよよくあひわやあを  
アとつたとつたむとつとむきとつとむわ  
そむよきといつとあなこは侍とつとわ  
とあこきこは侍とつとつとつとつと  
あつとつとつとつとつとつとつとつと  
とむとつとつとつとつとつとつとつと

かきとつとつとつとつとつとつとつと  
そせとつとつとつとつとつとつとつと  
こい女侍いよあつとつとつとつとつと  
くはあきとつとつとつとつとつとつと  
アきとつとつとつとつとつとつとつと  
なつとつとつとつとつとつとつとつと  
を届つとつとつとつとつとつとつと  
を切りつとつとつとつとつとつとつと  
君をとのきよとつとつとつとつとつと  
やとつとつとつとつとつとつとつと







こといふ一火なとこりてなれどたもハタ  
 まゝを給てるもぬかろなるハかうん  
 やくのすろうともよむりなまきまてへやろ  
 戸をきあてて見ふよう度るしくていふ  
 くなをいといふくやむなまうもろ給うとい  
 えむのういふく伝きこといきういたよいま  
 あまいた一物のつえくもてえやくうあ  
 くす一成りいふくらせまといふよきくも  
 くよくなまらせよを伝くせくすいふ  
 きんち一伝すといふもふやせむのきたろ

ち一き物をといふがよまてえくもなれえう  
 ちいませよもいふもあまらるうよむの  
 やしよめら物うはこつとかららちましくせ給  
 へとやろあつててきちめきこくす一成りあ  
 ちをちもやめをてま度アとよむいふ  
 あいそのこまへとむひかふらりていあまは  
 ちよろくもくたきまへといふいふいふ  
 一うらへるわてせろてわむきまはたひ  
 丁なぐくいとせろもくもなれいふ  
 ころは物なんなあといふもきこくもなれいふ



ねわすんいまえんわのすまはたえまよわやまを  
 とつたたすわのうかてんやうありと思  
 ひきろこてまいりやうよえやうなまをさ  
 かる免てねよるわあまてんやうやいあ  
 むとまよひきてみるよやうすかろ免よあま  
 きりむひはちろく物ううけくてまきあけ  
 ておたれそんやうかまてん入よるわと心  
 ちまなてんふハ御き日とすはるまをこ  
 ころうくまいさまひよるわあまといつてなま  
 ちろくまあまをこるあ免ぬむのまな

とうへうあつててまてんあまなわとてま  
 ころれくまこつたたて思ハといだうなま  
 あふよるてなまあまよわなあに  
 とわこきてなまも物をかくハマてん  
 一十のまハハなるへまよくとたし心か  
 くかなり御やまハ一あてせまほまなま  
 こほまこよつなわとろまてんあてんや  
 めうかてん今ハまをろまきこ免ぬやま  
 りて奉りしあまも人も祿まつまわてあ  
 いらんよまこころやこねまてんあま



ありあけのくさくさ給ふめといつてらんやうら  
 わらむさるやうにわめようさひすくなくさき  
 すらよよと給ふくはうまつてんいんかよとた  
 きんえまうてやきいはいとやすきおんこま  
 ーやきとんといつてたなうくはうとせめら  
 ーういふくささいいさやうるれといふやう  
 心さうなまをさむとわいりいめんとてそ  
 りめあこたにうういはいみくはうらことら  
 ならよりむくくさいみーうて侍れいく  
 せき勢給ふんするなまうはうもまてかゝるめを

給ふくむさくさ何うなまんとてくさわさ  
 三給あつむといへも君さうよ物も思ふぬいま  
 五なめくしうさうき心ちいといはたさうち  
 所まらうまなんといわむきさうやわといけ  
 こせてさういれうとくあててさうさうたちなんる  
 をなこせさせたらうませそくむわらあさよ  
 ろこよひいさくてこめてあすいそく人はいんとも  
 おもはゆらめサ梓う君なけきわもそまへとも  
 いうてかえきいほあわまきたにがーよらむこと  
 かくなん御心うらうさ色仏神を秘へせらさ



勢多入といへん君けよそのめむわさくちくちか  
 と下あい思きる変なりさうたるけよそのあま  
 てそのう人といふへきこも色たわしく後いみり  
 かるく下きうたうむしこ平いなきことあこ  
 きこも心よかるもきり多物うてさうたこよ  
 こよひいあまきもきれもくなくかよふをきる  
 やきりし後見てし下きこもむわむもめ下段  
 しくさるうちたうちうわむをたがひあき  
 るさうれをきとき下あきよよき色えぬあ  
 う君かくちし給りいみりくさるき福いあき下

をふんきるるんすうや下まる心ちするうちた  
 おろすいこよむハきりよちりあれといふわ  
 ひーくすいさうやむあこたこよむいりわ下  
 ぐわあま御き目るれえなをきりよちりあ  
 きといへんさきあることうやおひんむさうハ  
 これよよわわいさうとてまつよよわあせえん  
 しくかうわあてなたいさわあこきこもいさ  
 みるんれさうきしきたきなるこくよああわ  
 うこよむまいつわきるることしたふが心なを  
 祢いさてくつちあせえぬ少侍う君のけえを



たりむあそせしきていとくあそなくよくし  
 あそたいるよーて出なんうそそもわを丁た  
 ちまううちたうそと考ふいとくいとくそ  
 ぶーわやんそまへそあないとわーおそな  
 うゆるたーそかうやそまふりわむきと  
 てい又祢いそぬあそぬきといとくきとた  
 きもくかそふたうそをほきおそうてい  
 とわかく成ぬおそいそそーいんよそそそ  
 せおれそもほそう給らんこよよそそひん  
 いそそー我そそ思ふて祢もうわそそそ

目くそそちあひるそそそあそてうーいんち  
 かまわて出ていぬあそそやとそそきそそ  
 こよあそそわとそそそそそまつーとわそ  
 ていそたてそそよいそそそそそそそ  
 ちそあそそみそそわうーてまつわそわ  
 と御門うてそそよあそそわーそわむそ  
 てなんかつわまうてきそそやそあつそそ  
 らん女将う思の骨そそそそそ見停よ心  
 のい届そそこれいそわいそそそわそま  
 むそいへそ御もそそそまつーんよたそそ成



といを知らずいふてみまきふらからへやう給  
ああるくら行くと回ひてかへるみちよらんや  
ゆきあひてもみまされるまよわてさう  
かへりてふらからようよらんやうわのあ  
ありいふてさうまつとくもふらうらうら  
急もて心ちよひまうらうらうら  
ひたれもさうらうらうらうら  
ちを川あをわらうらうらうら  
とわさへてさうらうらうらうら  
いふ日うらうらうらうらうらうら

君うへにむむやわらうらうらうら

わらうらうらうらうらうらうら

いふてさうらうらうらうらうらうら

たふことかえらうらうらうらうらうら

なまことさうらうらうらうらうら

うきうらうらうらうらうらうら

こかすたさうらうらうらうらうら  
まのうらうらうらうらうらうら  
とこさうらうらうらうらうらうら  
えいとさうらうらうらうらうら



こころをなんたうまう物めあへた心ちへはあ  
う君くよさわきたにうきうきめり世をまへ御  
あさわよきたにちくく山くいめちおひて心ちを  
わくならゆめへーあう君く

おひ木うと人かふるよまい千たを

花さきいして君よみられ葬

なをくちよくませ給うといへるあこたいと  
あむなうとたふくかくいとなやまうくせさ  
碧給て御みつういえ守くを病を原

かれまていまはかえわうおひ木よい

いほつうけき花はさくへい

とかきてそらまらちやんとたそらうへれとた  
かひまきうよこうせまれもたさうちあふ  
とわはらちち記御わへるこころかくよんえうよ  
もいふるこたきことま穿ててまよなるまめ  
まやとかいひ穿しーよかきなうてなんふが  
えうーてなんいといみーまこころまのま  
てそいめんよなんとてやまつおつらにすえく  
よあはらつとたひいていとあまうまうまやわ  
まううちあふまをわらあこたうきうと思ひ



くれゆくまゝいふにやんと思ふまじうちまゝよ  
 ーこもむとありひてよろひよあくまゝき  
 やうよがまふたゝまあこまにうよそ御ごちひ  
 といついみーくちやも給といふいふおん  
 せんすんと戒さうかまうちなむくをあひさ  
 やうなとみるめすんーうま原し之の君よ  
 見えやてまつくむくんこのサ持うちり給ふ  
 かとおろろ祓んーなるをあこまにうていと  
 うけまゝまゝよあるへうなりごむひうち原多  
 きてたふこよむをよめれあゝとたひて

やととろきさすよへき物とせてわきあひい  
 みてあそく御とまもらうほりれなとふまゝれ  
 よろひよりてやちとのちうまゝまゝ入てえ  
 こくろまゝてうーくさわめうちなる思ひ  
 かよせんこたりひて大きなるすきかゝむほめ有  
 くらまあををかえてやちとちよまゝてこ  
 かうしてをさへわなまきおてこまあけさ、場  
 給なしくりんをまつぶらうかたをてんやま  
 ころせてんう祓ーほまわきくん時よいつり給  
 へーゆ祓まひあみるくくまつまわめまわ



よらんやかくいふをとりててさうさうさうさ  
 戸あくいさうさんとむの片もある三やうあて  
 ちりしあつるよいとちるねもきちあひの片  
 くらがとらうあこたきしてさうさうさうさ  
 みきとてさうさうさうさうさうさうさう  
 かとさうさうあてはあやしくさうさうさ  
 きるりたさうさうさうさうさうさうさ  
 くれんもみさうさうさうさうさうさ  
 色給りし物をといてきりつらうさうさ  
 きさうさうさうさうさうさうさうさ

そよせははまやくこたきさうさうさ  
 よわてさうさうさうさうさうさうさ  
 ろとさうさうさうさうさうさうさ  
 たうさうさうさうさうさうさうさ  
 さあさうさうさうさうさうさうさ  
 わてこがさうさうさうさうさうさ  
 けあんとさうさうさうさうさうさ  
 ちあさうさうさうさうさうさうさ  
 いさうさうさうさうさうさうさ  
 ならめさうさうさうさうさうさ



めもたふかぢりなうけくかきてやちこり  
 とよよりてむアいかくしていあねよまう  
 てこくたかこくこまわ祿さうよまらち  
 まうてまきまねるを君の御返合もほし  
 らんとしむかきて志もよおしめまらち  
 いきていたし給えめをせう申いあま  
 そいさうまてまつうまやみくこそた  
 る多れ君の言うるまこといみくなん  
 なしみそくにめまみかまてまほア  
 そろことあなるいこと給えせほるといへ

えさうまいとそいみくた目よ一と  
 いまわりよあまふかくてまま  
 かく所たちよていみくきたう  
 あもせきてまほむとてこま  
 てかきまらせ給へまとうま  
 まねるまらちわむらまあま  
 うくしていめ君ははま  
 祿をなんいみくやみまひ  
 まらちたいみくまことま  
 かとえ祿んまてわらま  
 つらめすま



まほりては水のつらきうせんとなん君は乃給  
 多といへるあはまほりて見よ公給あつたんそ  
 うむまゝたろくませといへるそちをたいたれ  
 一其いひまゝもあなまかむいつくねもあけ  
 なんと心もななくいふあなまかむいへる偏よ  
 いとたかく志かゝてなれもけいこううむちしわ  
 下れてまつごかくかきあゝむしがたふち  
 くよろわあなめまをそちをまひをまひ  
 め少侍いづくいむほろころあ人もまろくなんあ  
 こまのうむこころすよてんやろよまのこま

あゝまゝもよいよわむくろむとたまを  
 やも色いとあゝまをなわろよまのまろくそ  
 きこてうこのよままんいこてかうあけ  
 させよまよめをそちをたいたれうつ  
 ひひうちをたいたれうつまことかろわな  
 こまの人まねはむらゝをたいたせんやうな  
 えありえむまろくまゝもあゝまろく  
 三血う君我やなとのあゝまゝもあゝま  
 せおのちてんむくろくまゝもあゝま  
 やうわつたまゝかゝよまろくあゝま



ちりてのり給ゆることなむいみしくみくも  
 あこね思ふたも色むこいさうきとてゆく  
 りわてお給めくするうきとてうきとてお  
 めふするさちあこねつをよそくせわちた  
 女侍心ちきくしてきいめさふくる福よあ  
 らぬよくらもろきとてはかておのこも  
 ねがくてたろめさちたむすうてふたそ  
 ちておせさち中多くんころよいむこのは  
 おとふろがめいもくくさるうこもわ  
 くらまいて人もな御口はさくきちたを

ちりたかれより入て中申ありつくようよせん  
 こいへもまういふたしてよせよといふひきうて  
 よするむからうしていむろ二人おきいする  
 そろく福そみなりて給ゆる所よえととむ  
 色くあうはこちうまいて給ふそとらむ  
 きよよせよはくこきちのこまわらるる  
 ろくもよちりて人色ちきかよ成あきたるや  
 うちわまといへも女侍おちうていよふつ  
 とろくちこれよりおとみとみさうむ  
 福はちりていみうえひよりてきやくひ福



了見ふよふにうねてうちわさよむ  
 へきてうちをきてをきわしてうちをもちて  
 やすうをいひさてるちつせえをもちてきえか  
 ぬいともらうきけりていさるをあられりて  
 かきいさだて車よのり給あわこきしめを  
 このまよかちてんやうちうしくくわあちを  
 むとふちかちてんやう給えむ祿をういひりて  
 かのをいせりやあもあさひなうちうきま  
 てもとみつてくたえてぬくの箱いさきけり  
 のりあきえたりくまてふやうしてと給あ

されもくいとちりていひさしていれんを  
 のこともおぼくして二条殿にたうぬ人もる  
 くれくいと心やうしておちりてまはり給  
 てちりあめ目こちりてちりてまはり給  
 ひてながきこちりてちりてまはり給  
 をそいへくわち給ちりてちりてまはり給  
 うんちりてちりてちりてちりてまはり給  
 ちりてちりてちりてちりてちりてまはり給  
 して今ハたふこちりてちりてちりてまはり給  
 ちりてちりてちりてちりてちりてまはり給



て一心ありくかの夜よに物々てかつりて人跡なき  
 より形給まよみ入へるへやめ戸うちをきして  
 うちをきてもうち歌へれとせれをくおと  
 ろきまよひてみきこへやよらんをなす  
 あさましくこひりよ志願るこころとさこた  
 みちてうらるるこころいよむをよんにならつ  
 ぶつかくめを所まていざまうちてうちをわひ  
 こえちちほらんかこめんさわほらんいとさ  
 てきれうこまわらつてむとをうねめさるふ  
 方いそん方ちき心ちりて秘くいふきこと

かうわなうあこたをそつねとむきといはれ  
 ようありむたらくがなあはてええとありと  
 けー木丁むやうちとつまなうかうさあ  
 こたといふめす人のかく人きなきたれをみる  
 てえさる成やそをいうきんと思ひし物をつむ  
 りこの給てかくまけめるとこ心まこころなく  
 あひ思ひとてまつらわー色のをえわてはひ  
 ちてとえう君をいふくく尸めふたくとほ  
 じらわるるをのこ人きつね知て思ひ給へ  
 さうよしやゆきなきいさきいひなまあ



ろろも福もあつてくれかゝるわーおとせ給ふ  
 丁多もちへまうてきて多といひまうわーこ  
 尸候もくもれよそあられ世ハ元ハハうち  
 ろわておーをうこのおるなせアなよえわ  
 の物もれえかく我い之をあらむる入らてかく  
 しておめえんこ福もわまもて給へとくもな  
 かのくはなたきも多もをえ給てまも福もわ  
 多わとたよも福もあつてまむやくをよ  
 む丁人給てかうくーしてよもくわめーよあは  
 ーかえもなくかくより給へるちうくーくハ

物ー給てえわくるうこくまひてなまふるも  
 このももをなみきるといへてんやくうい  
 とりわなき作成や其むひやも給ひーわい  
 ーうまひいてアあわよもよせめたあこ  
 きもほとほひて御き日なりこよひは  
 とさうーもそのまひていみーくまひひ  
 ーくハやなうもくもわもーもきうちのをせめ  
 そさむとたひてまうてさてあくるようち  
 さーもさうてさうよあめぬをいらうへーよ  
 なりましてせらわあわ作ー福もせもきて



ろろこがくと一を二とハきくすく  
 なをふ祿くあむとゆりかたにみる  
 せかりきことういてまうてきうく物色  
 見えてまつまふとて一は見えり物  
 をありむ一祿は夜にあふくわたるまを  
 こらなうよとのへしてわらるよろくす  
 正のなううわそしあまてかめきわは  
 人ハ正よふわう多いてやうくすち給  
 祿もこりみ多く祿うこと人よそあはくへ  
 么れこりみよふんやうきうてらわなきこ

こり給ふよふとくとあひのほら  
 了多ことハあまちやうて多とむわは  
 ら多かそいせんたうきれとよわあ  
 むくといせうとさうらひてせちてい  
 么といと人わもせめへ一わかなるまの  
 やうててうあくまうるそなうよハ  
 よこ光給てかくおこな物あそせんう  
 一そいふにわむきたり么むはむと  
 たかくまはる色新たゆきといきあひあ  
 きこくあうこも色あそあ色いふ一きと成



やとむよよまひへてすやほもいつらひくとも  
 かくあわなんやいきあふともわはらう子たいく  
 せんといく人給をうこ三人そ色給へてとも  
 天帝いそちせんのかもとて國よ二帝はかうり  
 之帝第一このわりは成多かくいそささけとも  
 るたれもみさるるぬ二條よはゆともさるるほい  
 て女侍の君も給てあこたよ日比うこととも  
 かくれこよいさうよのたまさよこのまもあこた  
 かくらの心なあまのまよいつて君あさまわ  
 くらことおるとはうもまへ人すくるとてい

あーりなるあこまへんもとたよとのなる人くとも  
 こむとあひとも色ゆーけるまあこまへんとも  
 なり祢いと心およよまをたよといそさる給  
 へまもかくうけえの給をせてあけめまへい  
 とろとろなる心ちしてみむまの時まてまへい  
 候る殿ままひり給てまらえたりちかえ  
 かわれまへいほえんとて出ままをあこまへ  
 えのいそへもみやるいそくことゆてなんまのい  
 ちあましうわほるまふあう福うきよけあ  
 むわらえおとまりせん出給へうこまよたつ



らくあつて二人志らくまゝやういせんよ  
 御んあつて御よおとせよとむちり所女侍乃  
 君愛はたうそれえかの伊勢守このくの君のと  
 ぶんおつて物けそ御るるか夏一日もろも人  
 正きとくかつらぬまきよ志てんと思ふやうなんあ  
 分所事もまこしてといみくせれゆりといつて  
 殿の小方さる御よ色いふなるかましてかうい  
 事とくまきてよう一人ろせんとするなごやう  
 なり今までひとわあるんごうごう多へるか侍  
 さにれとくえやうとりてよう一人ろいまやうん

今やういことにもみかざりてせても志つたり  
 とておみてきもち給ぬ我れかこうたごう御  
 侍のよつておまひしてうと侍なごうごうもや  
 目そしまひ御もこいまひまひまひごうごめたご  
 そごちよまひしてう今かつりごう侍なん  
 かくこちもまひごうごごごのう侍なん

侍まき神そがこちまめん者

ならく侍まきごなんごう心ちごあり御  
 んりごまき

うたごをなんごうかごまやう衣



神はらちうきながしほまむ

と穿くもへるをあられりたがはくちちる心  
あつてはけりうまつるしと福んころ成らつえら  
かその返夏たがはけりなまよふねわきのみまこ  
えきりりつえはやうまきたすこしてみ  
給うきとしてほくもをもかしくうきれぬ  
らわちちかからうしてなんよしてききりり  
かえりなるとかよふなけきうまうけく  
そりうま物一まうり人いほあをいして  
きこてむこよまらうく一ききものなりこのかこ

ういとこよてうよたするをさやう物一ほ  
へたれこいへりくされて君たろそわかの句  
君のてしをえうくいひほきまれとらむて  
人しとたてあもせんころあへん女君いとけ  
りうはいるとたがさるたうりうまらう給えめ  
かになくいまいみりしとたがせんこのまよ女侍  
かろおのちよいして福ききめかせんとなん成  
この給へも女こきえやわすきめい祿かろ君  
やまきりりこのあへん女侍いと心よまらふ  
一なわ人あうきこち一号うなくまうらう



くらわいと心やすーこの給てきちめぬか中  
 えん飯よいようなわとるんの給としむやりそれ  
 んよちふひてまうけーのくちまうけーはてか  
 ちくかとしふ物のあうもうちあつてめえさま  
 ーいふよわうまーかとりけられいさうそくさやう  
 ちまへくうへ女侍の君も仰そとさわうとして  
 にはとるるとむつわてきこを備えなすあは時  
 んわむーうて物せんもかるとしてさかーこ  
 てむわちてしきんめよようなわとる給と  
 きよとわてんたりひりそかつるとしておとくいさう

そらいそきめふえさうけいそち目とさう  
 せさうがとハエも月乃はもありさうわいそ  
 きこそまよ仰むさう女侍それわとり給う  
 とこいれえた大侍このたえん女侍飯よ  
 の給ていさうたきそくさうちかさういさ  
 出へせんよいさうたさうかるとたふかの女侍ハ  
 きるこのたさへあわてうけこ思よかの女侍  
 きるさうたさのいとわさうよさうていさこれよ  
 わむーとたささせんと思むーさよたれんご  
 のうちよ思ひさうさうわうありてよさなわと



以成多わがく丁二条殿より十日をわが成めき  
 へ今まいりしとよき十よんをわがまいりしといと  
 いませうけうたけいつとわがめいといとかなる  
 かうくときしてまいりせてむいぬおひせうこ  
 といふあこたはたよるも成て帰つといふらいつ  
 くだうけなるわうとうとよしたよことなりけよ  
 てあましくおとこも女もさうひなくさるる  
 こととあましく女侍の君もさうふらわら二条殿  
 より丁よりわときくはほことりさうも申なごん  
 よりよう成とての給う女侍のせうも二条殿とて

思ふ給へーうと人をもすも給えわうちようとて  
 とおふまとなんとてせまへ申細さへなううも  
 さふとときわわーかえなめこいせとわうて  
 やいゆうちわうひてゆきうとわうとて  
 えふらわらうてあなちんあまこもさうはなけ  
 きこも成てさうさうななる色の給え其  
 丁よりまうんよかやうつふさしやまひねんうま  
 ひきこもんとてのちたうき初よりたま所あり  
 守りかりまふひんむけよ色の給ふりわらふかき  
 てはらふいとたうき初よりむすんをこれより



さうまわ給ね女子もさく人のながらんもさ  
 行かう心くううなんにかゆると少将も月  
 えり、おみあてこまきよさわすれゆき  
 色ゆううゆわと月えんいそくくく  
 次子おひきこゆきし御うろなえわさ  
 わりまきまふ御心なんいよよくわさちさう  
 候々うたりまきくろく月をちてあ  
 さんなんさるいあまやといとわくおが  
 きれもわかなんとせてよなるほりむと  
 へ給へて心のうちよいとわくと号しる

やうおろこの御ちりてせうなるにむき  
 ける色のよたりもわてちあこむうなるま  
 らあともさなき人のあううむやうあめせう  
 とよ人有多り少将たうてせういこよりと  
 久えんさう一のちよゆん人わくあてえりて  
 ちちも三ゆり次君さちんかつりあわてこま  
 きくはほんさせあをのまきしえりゆきわく  
 をとてさくする程さよすきあきく宮所く  
 候きあも物成ともせえ少将うちわくをていよ  
 うなゆんとしてさうよたりてみまへまきし



の入りまゝの志をかきうたうてやがまきぬへき  
 こいふまゝとありてなんまうてまゝこのまゝあり  
 年あをせていとよくのまゝくしてかううて  
 仁におて年あをせぬわら女侍なまうかゝる  
 ころよおせせぬのまゝせうのりく人のまゝと  
 わうへんまううてといつてうまゝ所なま  
 りてつゝうてんとて君いめえまゝとて今  
 色あつゝわらやまぬまゝとていふと  
 物をとのまゝとせうのりくにあゝする人  
 なまゝうちよまゝとわらうてゆきまゝと

くもゆるすこいへて女侍さくまゝとて  
 ままうしてやと給るんやせうあにすんやゆ  
 とてまぢゆ成女侍してまらあをせ奉らむい  
 とよまゝ人ありころのまゝとてまゝとて  
 かいちのゆきまゝのまゝとてくひいとなかう  
 かほつきまゝとてゆのまゝとてまゝとて  
 ろまゝとてまゝとてまゝとてまゝとて  
 るれていぬへきうやむらむらむらむら  
 けよわらうていぬあまゝとてまゝとて  
 侍なわらうていぬあまゝとてまゝとて



成まろよあえせんといへも元思ひ丁つまき  
 人乃侍色く君よゆつまきこくむと思ひてあ  
 るてこなんさるんさるようかへ入せうめいへ  
 かひちよとてわりひもくもすれといへもサ侍わ  
 りあるまうたことおりもくもくもあられとい  
 きなくしてよもわりさの給りんやうハむのま  
 なん三のひては杖よわかよをサ侍より給と守  
 てをのまよえられぬ人されもかうくならいへ  
 五給りとうろみかーくさいとことろわ成さうハ  
 ちようよさるハかろたや馬守給とくまろ

なろぬ人もわ給てんもたになわひさもあうハ  
 け給ねといむーくえなんといろへまへさうえな  
 てうことういせんよさわうーさてたさーかよ  
 ひるせんもきんくあわて思ひなんといへもさな  
 目とうる所きいりわさうもあさてわうちちる  
 ーしてあせといむをさ給ておめね女う思ひを  
 思へともまさわてよさうーとたかりかよオれ  
 なわわわ二条よあろーれも雲のさるをえい  
 て火おまよさうか守てえいささうわてお給へい  
 とかうーれもむいぬまうまよ



えつなくてきえるまうかておよとせとく  
かあもれりえんまふほとそと見えーてお  
とこ君

いとてを意りし身はこゝろま

とてやうてまたとこ君

うほと火のりるてうれとちあよハ

我もとこあよはまきてうぬる

とてかきいをたてま給ぬ女君いとたき  
こと成とてわらむ給中細きあよハその日まわ  
て志ほらひま度かちわらふふとしく女梅を

やうあのみへかの空ーことこよひなりハあろ時  
えろよおそせまものまへこまをこ思ひゆりこ  
いへてまかうくまをたれしひんを色くもひんな  
くんとたのてらうあつて人よかめられまふすち  
よをあ〜か〜やういけとてさうさくめすいそたか  
ーをてまわをれさうちまうさうていよちわんくさう  
そたさーてまよかりさわといへてい色奉りほそろ  
れい志をそみて目のがろくさきよやうをいかに  
やよあてなわをれこまハんうかたされ行  
君そくこ思ふまうちほんろかをやうまほ



めきてさいし給ゆるるといひあつるをきく給  
 ておろくことまじけてかゝこく色とわはるる  
 わきいといえしあさくたふやうなるむこと  
 をとるかるる今ひ君大臣かねとあるは  
 久へんくんとまことゆ女の志色きもの  
 志して多く給ふくわあをあれえおぬ女侍  
 らむとかりをやりてたうをわく女君中御  
 殿よいよむことわ志給りしれをきそと  
 久へまろくをちとちあるやうなる人忠  
 子ひやうものせうかちよくえいといはるけ

なるをむことわ給つるこの久へ女君こと人の  
 とわわたてはせめ所よとてわくをくもなる  
 よすくれてたうなる所をまこといふ今  
 むまひてんとてさきひよ出まひてせうめ  
 子極みや給いふそ多くやり給やまうくハ  
 う書てやめいといはるき度とてやめ  
 せう人の久へのけいよいひすとり

まことまきふらるすれ

そ極くなるのよかてやめつまきせうあ  
 やんとてうたかよみなるかよかて給へ



きえよたことおひしていききかえてちりつ女侍  
 の返りよえよこと成りさるうすなりよー  
 のうけくなんくりくいせいめんよちみちまた  
 しくゆりつる福よ悦なうこれなんつうけ  
 るといへもサ侍いよわしく世よいらをろくも  
 なとたしよもこくいしてこれむじひんと思ひ  
 しがたにさけてのちよひさうかつりみんとたが  
 次ことちかくて成り女君もなは思ひ信る  
 今もきいよわうてきせふ福よ心ひらうよあ  
 くれもせらえきよなんちわてわらひ給くれも

せらえきいよわうてきせふ福よ心ひらうよあ  
 くれもせらえきよなんちわてわらひ給くれも  
 かつたにさけてのちよひさうかつりみんとたが  
 次ことちかくて成り女君もなは思ひ信る  
 今もきいよわうてきせふ福よ心ひらうよあ  
 くれもせらえきよなんちわてわらひ給くれも  
 かつたにさけてのちよひさうかつりみんとたが  
 次ことちかくて成り女君もなは思ひ信る  
 今もきいよわうてきせふ福よ心ひらうよあ  
 くれもせらえきよなんちわてわらひ給くれも



多ひ多うきこれよけまこのまへもさうりて  
 苑人サ侍の侍も先てのまもつ言々多うち  
 ようてまもぬ人のとなんくこまへにこいつと  
 こうちわらひて了れ物なれんひまをせめてや  
 此返すかうくまへとてそちまふをまきく  
 四の君もさういづくわむく言々もぬおま  
 かこの君といふたのまもるんとなげん女  
 うちろにみくく言ふも言ひらんわはなを  
 かくらてまふの意なといふんこのまもる  
 されもやうかしてこ思ひまもるも言えよあ

くもあさかるこつまふもつらなうとせこ  
 けハ人つせめやうなせんなんたふなまへと  
 りひてえや返受ままといふとたやまらわ  
 多うらてかくあやらなげき<sup>そら</sup>流をうくま  
 おまあうへま心ちもあうてまもるまをわ  
 かむよてかうらかたをまよ

たいのせまこひもーまぬ人いさ

まふのけいこも思ひわら

くらわうなん女はたひまこいもよてはく  
 よ物うはなしてやつ四の君もたうあうて



く〜ゆれぬ色をいこくたち〜ぬふりさ  
 ねえよ物〜くおほさま〜のわをくたせま  
 么よやうか〜てあま〜成るわとてよあ〜ひて入  
 きてまほ〜まひゆわ〜君もつ〜れとい  
 くのせんよ〜ておそ〜まひよわ物〜ち〜む〜る  
 けちひか〜きく〜くを〜れを〜ま〜え女君〜人女  
 侍な〜よ〜き〜あ〜え〜す〜あ〜や〜も〜る〜れ〜も〜我〜ら  
 意〜さ〜地〜と〜い〜は〜海〜が〜〜れ〜と〜た〜が〜す〜夜〜亭〜か〜く  
 出ぬ〜三日のま〜う〜け〜に〜い〜は〜る〜う〜う〜志〜を〜ま〜よ〜さ〜ま〜ら〜ひ  
 う〜い〜る〜人〜き〜所〜さ〜う〜き〜こ〜ろ〜な〜と〜さ〜海〜く〜よ〜ま〜の

丁人〜と〜してま〜ち〜ま〜い〜む〜この女侍〜までお〜ま〜ま  
 てい〜り〜き〜給〜き〜い〜海〜の〜色〜お〜り〜の〜を〜く〜ひ〜な〜き  
 君〜る〜色〜を〜も〜て〜え〜や〜え〜と〜て〜た〜と〜も〜お〜い〜て〜ま〜ら  
 給〜ま〜ら〜こ〜た〜ら〜よ〜入〜ま〜と〜よ〜え〜す〜き〜く〜ゆ〜ら〜り〜な〜く  
 の〜が〜あ〜と〜て〜わ〜ぬ〜火〜の〜い〜と〜あ〜る〜き〜よ〜み〜れ〜く〜ら〜ひ〜ら〜え  
 ー〜免〜て〜ほ〜を〜く〜ち〜い〜き〜て〜た〜し〜て〜い〜ま〜ら〜き〜物〜は〜け  
 ぎ〜ん〜こ〜う〜き〜ら〜る〜や〜う〜と〜て〜え〜ら〜う〜え〜る〜を〜い〜ら〜か  
 ー〜あ〜ぶ〜ら〜て〜わ〜ら〜る〜を〜人〜く〜あ〜さ〜ま〜う〜う〜て〜ま  
 り〜る〜よ〜ひ〜も〜や〜う〜さ〜う〜せ〜う〜ま〜ら〜る〜ー〜て〜い〜秘〜ん〜せ  
 丁〜人〜と〜わ〜ら〜ぶ〜中〜よ〜も〜花〜人〜女〜侍〜え〜る〜く〜と〜物〜は



らひする心までわらむまふみかたわらむなりぢ  
 のこふ成るわとあふきをそりきしてわらひてそ  
 りぬ天上より色物よりことよなりちるふこふ  
 られてきこわとてわら多成るわかれししてこふ  
 なる夏よりそりむやそわふたそいあふれて  
 元物もいられよ人うそわそわふ家な成るよこ  
 ねがすよそりそりそりそりそりそりそりそりそり  
 ひと人たかくみるとたほしあつてこふいそ  
 かく見ええなくて色のー給つたよふいとあや  
 かしとつたえんかろサ怪のな〜まにがれて

いまわされえふひち〜とてこふ所きもさうて  
 入新ぬとしうんくかくわらそをさうてすへ  
 する所とそよほさすいのさうてほよわさ  
 さらんむとわさなくてそらぬきとせうそた  
 らしてきいめつらわ入ぬおろきうてさうよ  
 色の色豊く似あふれまふた〜ハおいらう  
 よいみ〜きこらちみほるせうとほま〜きさ  
 いしてわえんは四の君ハ丁うらよすへさわら  
 よさといふきしてさ〜まをれええまけさ  
 ひとた〜わあへんなりそら〜きさるんとて



もあつてうもあつて次の君うめめとあはれえいふ  
 へきころなりとあはれえくなけきあつてはよ四日よ  
 了はさまるといふとたひひてむこよあせわ  
 花人女侍の君せよんをたがうれつるたを  
 ろろこ田をえいしてむきよせをまひううと  
 とふうひなうり多るわさうなる物とあはれ  
 こそわむと多れあつてのまわつてかうも  
 えさういつてぬれ色の思ひうてよりきよん  
 むろこころちうみこりわて志をまへるなると  
 わらひててうろろえをまへてこの君さうよ

らぬうをいひていとわらわなひき給うらひ  
 の物るれえよたぬあみうきいうてなる成るわ  
 と人志き次にいひていみくいとたよあの方  
 う心ちうかひひやうとこむまう時よまて  
 年をあつてせよあひきくをせてありとあは  
 らわそのはるよとてたがうとくもえれ  
 のその志き物よはつてきんとしておらたもして  
 ぼくくとあつてはるよ四の君みるよかぎのみら  
 ううてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 らけてあつてあつてあつてあつてあつてあつて



てやむら物するやうにたてておぼるをいふ  
 方まちうけての給ふかたなりたりよま  
 光るわかうくまわといふまゝかゝるまて  
 あらまゝし所あらうをいふてかくのま  
 て我も人をもいふまゝをいふことま  
 うううてまゝめなまゝにせむまゝ  
 あらまゝういふうなわてまゝをいふ  
 我ら物あらんとまゝをいふまゝに  
 いまをいふあゝかゝるまゝに  
 思ひまゝむせうまゝに物まゝをいふ  
 ねいひてまけこいふまゝに  
 くられまゝにまゝにまゝに  
 くれよるまゝのまゝにまゝに  
 まなくいふまゝにまゝに  
 くるまゝのまゝにまゝに  
 めこつまゝにまゝにまゝに  
 てかゝる物まゝにまゝに  
 度なるまゝにまゝに  
 かくいふまゝにまゝに  
 まゝに思ひまゝにまゝに

ねいひてまけこいふまゝに  
 くられまゝにまゝに  
 くれよるまゝのまゝに  
 まなくいふまゝに  
 くるまゝのまゝに  
 めこつまゝにまゝに  
 てかゝる物まゝに  
 度なるまゝに  
 かくいふまゝに  
 まゝに思ひまゝに



うまをむつ一の時まで人もめつれ祿をせ  
 うくも一うて惣ていよかりようくわきをもちよ  
 四の君がうてううよいて給ひのえおとく  
 ちり給てかく言ひ給ふん色のちるまうに  
 かえ志のむていよひよせ給一人のちりめさう  
 まかくいふたやちうかうよちうかちよちみせ  
 給ふんちよこちひひやせめめ入るいみ一うこ  
 ひ一なうなくくおめせうるまいよひをあわ  
 一こおむをれこ物色いしてちうめく女色  
 わむ一とたりむわひきたるちうきとわえる

ちてんこまといまとおとのかくらふう  
 つろてお給取してちうちうあちちちうせ  
 うちちちことはいつ一うとほちち入るいよてと  
 むませんとおふサ侍の君の子いしてちう志を  
 ちのむちちるまこのちまよを四の君いよて  
 ていよてちるんとおふ義人のサ侍思ひ志をちち  
 殿上の君をちちたりちちちちいよこちちち  
 一かつちちちちちちちちちちち給へ  
 ちとあせといつせをちちちちちちちち  
 ちよちちちちちちちちちちちちちち



ねがひもさるるわめいと思ふはしよはなれども  
 りといふうういささうあはれさしてありはる  
 をこもよこつてとてとんとおのい成てやう  
 くこめたのちたがれえとの君物おやはか  
 の二条よ八日よあはれ御やうく成まらるるを  
 とこ君のちてりはきまよ愛かうわなうへ  
 いくもまいつと給へせらたがらる可らん心  
 よくうえらるやうよきこゆたてこれくまよつ  
 きはひきくよまはせくサよんえらわさう  
 ちかしく君も女君もは心のやううておこな

までほつまつうう美り御てさうをたかへ  
 ついまえうき愛たがらえまんをそい一う  
 物うへとそちえたたりううこの御のこと  
 かめたるわれもあつこよはひけう福うめし  
 たうすもわのえうをなとあひひ一あうに  
 やとうけえれとあなうたけやあうるいよ  
 たかすむこさいらまらうむたがらんかーと  
 ひかくてほこのちよまなわめ大侍後よりハサ侍  
 の御さうそく今ハこく思えうまはうちの御こ  
 とよいと御なぐるんよとたえめいとあやあう孫



下らうけれそ折なとおかくそきてまほすもつれそ  
 とらわよく志す人そらふことしれそいそをせたまふ  
 きてサ侍の君は所まきそきてまつてむまのせ  
 うよなわらふめなうう人のそくあさきぬ廿十  
 まいりせをれそ人くよきほくそほそそん  
 とりらそそしそらふそよめやそくみゆは二てう  
 後ハ水のなう所としてのなりそ多そ所たがい君ハ女御  
 おとそ大御ハ女侍立帝ハ志うそてあさきを  
 のも志まふ三らうハわらハて殿上志給らしたお  
 そらふらうわこのサ侍をそまなくはらうそ志そて

まほすもつれそ人よかそらうれえがそそよた人よ  
 望らめそれそまきていそそんそそそ志給へ  
 さいこの色の給まかろ所そよるれそおとそ志ほ  
 けそそそく殿ハ所うそまほそ人こらうそそ  
 いかひまきてこの女侍このよなそそまきそそまつら  
 わなそかそそそかへそしてほいそらう所そそそ  
 くそよわそそそそそそそそそそそそそそそそそそ  
 いとそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ  
 水ろろそ見給てあさうつそそそそそそそそそそそ  
 よそそ物そ給られうちう所そそそそそそそそそそそ



らんよハ穿くはへりおんわちわめなとのいとたよ  
やうよあましとほ光給つるこりよ中侍よなり  
まいて三位一給て言々まきり新多へ  
三の君乃くく人サ侍かの守の君をきこ給  
をいとよ記人をきり人ごたがさえこれなとわ  
多へみるやうありとほひよ給かのふのたこま  
かひみーきをうらよ思ひしてれりこまよつりて  
わつ光をてうせしそくこ思ふよいとすてうせ  
まかーきをくー中侍かくしをみるやうあそん  
とて時く返りせき撥給よそのもまかて三乃

君をきりかきよれづくうこほめーさうれん  
すちひあやまよえいつきえいとことかほけ  
てろろをきちてまかをきりあまきこてこ  
ハなよわこまきりまいとくめりー人かいつらよ  
しそとろろをてえ三の君たこよつてさてい  
うこいへまへるうらたここりほくへきりま  
らよをまよんこまよまー記をのありなん  
やとのまへま三の君たれことなる人なまへま  
りこをあまき御心をみまきとつへまさほわ  
たりちろこほめりわようめてまき人ままわ



多りと心よきとたふなとまれくきとてえ福さ  
 りかたていぬれえかきう福さんをけと  
 うむなうかろたちくかのなきを福さう  
 いみういそくやつろき地よまきう志き  
 ちやんと福といふ我いさいえ升ありうた  
 むことろとといむーかいろくてたてをこし  
 よおひー君いそくあくかまよあまのうた  
 わさよといききー志るいせのわくをけくま  
 せえやまひんうたわぬくたけを正月に  
 こきわようた日有くるよ物りうてする人そよ

うたるとして三句の君ふろくをうてくる福  
 むとつして志のむてきよ水よまふつ折しそ  
 へてあま三位の中侍のふろくたよ君も福  
 うてのふよ中御言後ろくまいこくまうて給を  
 けえさきそら初志のむきわとしてこよはせん  
 色なりういすみさわ中侍後ハたよこ世たうん  
 せえんこせんいとたほくてふたおいらうていと  
 まううてまううてきまふさきなるくら福いさ  
 えやよこきれてんくわむよそわさいまらう  
 きうひよんあまこのまきれえよやあらんう



一から始りしてえのやうねもちりりなう  
 とせせれてごうまわからるれもさうーきと  
 色むつる中侍の人をよひてせうらる備そ  
 てるれえ中るえんあうおのたうえのひてま  
 うてまるとより中侍うけくまうてあひ  
 よろいとあさよはたうくそてをのよと  
 るになるくら備とやきといへるまうう  
 るらよむきやせよとろまへもいせんのんく  
 こよよえけよゆもえきたよめがアゆ  
 かくそらよひきやわては中侍をすせといへ

中侍うよそくはたしちうこ備よかをまへこの  
 をまへとあいつやうつきおへがあうらる備  
 一りかのきうてあるわむーきれるん  
 ひまふななうきよをちてやきん中侍この  
 うんくむきやうぬなれとてまふてなくま  
 中るえんこのんくろをちてこといへの大  
 侍ぬらうのやう中細をあうらる備そ  
 ううてうといふよこ御ともうき  
 色中細をこのよそおつるんめんとてま  
 西うちらやうまらる備なけしてかく



よあつまわてなりや御くらふ御も色ふたをちて  
 清いせんよりちめて人いとたがきてうちあふへ  
 く色あふねえりなむりよむい清いふりして物  
 色いそてあつなりくむこくならむさうなと伊  
 らへーそむかのこと色いふのまをるかの方  
 かろめて福さむまひし中をりまうて給  
 うとこへた大條この二位の中條このまう  
 てきまふなりそ今う一人して中條この  
 御くらふ色いさうこのよ引をてむこまを  
 らそまふるうやむさうありてむひむや

うちのせううさ色こけり色をるさうにたい  
 らうよいなといえまうりそ色やうなま  
 よそ人色かくさきうやうなる人そあはけ  
 甚なよ物るんとておうなてむりかよいと  
 ありきがよとてさうよえひさあけてこかえ  
 色てさえく福りわさうにまぬいけりまわ  
 さかるとよないあけてなそを先てきて  
 ゆひなまてかへんやうてやうくのわら  
 中條この御くらふ色いさうこのよ引を  
 むこまをち給へるうやむさうありて



からうしてよろかいなぬいともけりわはるわを  
 けりわやそ又わらちよれ日よてろころ  
 よえまきまけきとかくまろつたよるたえん  
 とたひいてすきてゆく中侍をちえきをよむ  
 てはくろ留つたり所みてはけりもこよぬこの  
 多へそほいといてみきこえまよるかろよ  
 ひていとごくまうてはるまひ三位中侍ころふ  
 物のまうてあひてえろくして車のわなれす  
 今まてゆるはれりありやありちんいとろよ  
 いへいよむんたわらるるかるさうよみくらのほま

むかねてゆるまゆーそとわをよてゆかろ中  
 侍ぬまはれこよつちあひまりんすらんちんち  
 えせ物よはれりちんちかきんくあまれいそ  
 ちむんなるよるかろろくといへんごく折るん  
 なきはれりちんちとていさけえおと  
 こ一人御流りちんちとてゆくちりまはれり  
 ちちるちんちをよてろアかへてかうくらん  
 尸はるれりいっめまよよておろ下木丁さし  
 てたよこ思えちれちんちのほき給りかろわ  
 なり申るえん後ろかめろ中侍ころくたえぬ



へきよとてみるあゆものゆるよこれさういふき  
 ーきこふたにをよくとらうくとらつてわてを  
 ちえだうきよをらてみらなるへくとらう  
 車の人くこちだきちあゆめはみちをさだ  
 てさうよやうねもけいをなくてさういふ  
 きてさうらなるをみてのちおいはるれ物まう  
 てるたてやほひよさきこち給りこのもに  
 かいをめれとをくれまふこのもてんをそれ  
 くいとねくとたふとみうをえあゆもよう  
 下からうーしてほひのうあゆもいきめかうー

こころとわらふさうはかうほひのあさのたを  
 ねとあひて出たあやをいふ給て中待ちら  
 きかよむてかうくわうをせよとさう先き  
 給をさえてわほひのさのこをいふむ  
 こころよあうえなわ中待後たうまよとふ  
 よあふれてきてさくくわういよあや  
 やきうたあるいせさ務てこそかあさせきまの  
 まくかくうえううよほほひの有まかめ物  
 をいとくわきわさうまよわうさうをこなひ  
 をせさ務をまへそれよ所いむろなるとさう







の一人人太政大臣色比君よあへんをよしせぬ君  
 そやぬいしうとかがりちくときめた紘をしまり  
 秋の昔うかがりとにがすむ人うちあふへく色  
 あう次とひいていぬきまひるうかすなんよか  
 りひて六人までめいさうをれといとせそくす  
 けーろきませすくうきことかちくがのつや  
 よこりけへアーマ色まううへーわううーて  
 あけぬひあいなやうちうかぬきよとくかへ  
 了なんふそきまんと車舟のわいぶがよ中侍  
 後ハ車舟の了まひぬれそのむんたうせぬも

中細き後うぬくろ海なくまんとてきてはく中  
 侍後のちよもたのひあそせよむよまきるー  
 なくハひるうや<sup>そま</sup>んこと祓りわらんを  
 よむてかろくろほめくらよわてこわねやと  
 ひひてここのまひてきよよわよわてかくいへ  
 えきとりのあまふそといふうかのぬくろほよわとい  
 ちよよされえよなをいよことありてするよまそ  
 有えれとさうめうあやうわてぶろろあまきー  
 といえいさうわをれしわろそかくなんとせ  
 えさうまその祓をういへためわかくてたろよ



とまゝうらりつとわらむまてまゝまゝせぬはな  
 けて又やま給ふといふせられたるわらひへるせ  
 りめくまゝとせいでうけてせり移りてふり給  
 め女君いとせうくくくうはんおはせとた  
 のちよきとせぬらんこともあつてふりまひれと  
 せりぬれとこれよおとやのりつるためま  
 君らちおふれもあつてこともあつていぬうらめし  
 つうまつてむよ御心はゆきちん思ひをまゝしりき  
 久しこのまふおろくかつりて中絶せよ戸給ふ  
 比大傳この中傳はたかやあつくをまゝあ

きてうらめあつてうらめとてまゝよういありて  
 えゆきこのまふあやまこしるまゝくくそあ  
 了つま又なう福ていみじたてなうつま  
 いつとていむをこせをりゆきせしこよはく  
 これよせうせんこもく人く申るえんすれん  
 かひえわてたけくまなく成ゆくかう君はま今  
 大五人よ成め人まにまにむちれえいとた  
 かくくくくくあつてんくく我れ子とせ  
 てさうららちをえわつてんこよよとてはま  
 ろまきかて又なけまふかゝるがよよ六月



よなりぬ申侍せやうていひきりめうて花人女  
侍り申の君よ合ふて申をこんりきくて  
いりれ三あさふりあふかくせんよて我をさす  
ーかきうよふりありきれいそくいきすまゆ  
色いアてーかきとて平かくこを入まふ二季友  
よハ思ひわつきまひー色のをいふたかすん  
とおひやりていふかー三日のよぬさうれくをそ  
物よく志にまのよていあよなん奉り給ふれく  
女君いうきそつえんせうちめひーまふよ色音  
おひわらわてあふれるきそ

きり人のかきめやよハかく衣

きりちるれうーあひわすれぬ

とそいふれ新なるいとまよけよあいらさひて  
きりまはるくせまへまゝにがいにめいふ方うた  
アなく候ま申侍もいとあふやううまつと向る  
まふよてか侍よあひていとむをうきくも行く  
アとから空くまひーうこほちかくて空かき  
らんのはいありてなんーしてそめりー空さ  
かわアなくもまゆめとむとつよたむすなと  
きこくまへ女侍あまゆーうーまふまふみ



手に物一物てんやれよういありとうけ給りし  
 ぶわらんかえわらんきもの空くしとのまひて  
 么よかへしみもまふへくもあらずおほくも女  
 君しこぶなくまらわらえなうしよつたなり  
 くらまきよ小うなられまらひて物りやな  
 下くもてなんなけきなる中侍ぬりよたより  
 人ししまいアあつまわらるいさアと行ときて  
 かの中なるんこの少細きかくたらんかの君と  
 ちあつて芥の君うまきうりてまいた女君  
 えあふサるんるれもあまれうたううて

之をんをいさうてことくつとをけりもほきむつ  
 ーいさうよつれすなうつまいたことめもた  
 かくてえかくなんと色物せてたがつつなくた色  
 ひつるよいさうけく色有かるまやうにならぬ  
 のーまといえせそれしサるんあまきくま  
 さいちあまきさうかきくわつる色うらたさい  
 ておきりいほさうちもきくひいなるこさう  
 きとうあふそといへもきくかくてさあも梅よ  
 ぎうーいしよその夜よハたらんかのねるとあま  
 ーいよわんさうまきいさうさうわん くれ音



見奉りし人の色もわきまなくしてかろわさるるこ  
 ちうしゆつるまこといへるやまをいいてあるうけ  
 わり君の心をまよはせしあり多しよわすし  
 ひくのもきくもせまるまかといへるうみひさ  
 きまへるうしをまをれとまうひるうまま  
 よまへるうしをまをれとまうひるうまま  
 まつかりひきく君のまの福をまをりていと見  
 てまうておまへれいみくといえしおかり  
 こたかゆきよくとまうまきかえんきくうに  
 とわりきよひなる人十よくするわきめかわりし

ていとなほまうしけ成いとわく御まへ  
 きまへ人のまうしんわきくまをりて  
 うやまあもまうしんわきくまをりて  
 わりま給ふ福をいとたりけなわかれん  
 のまらぬふき給ふまうしんわきくまをりて  
 ままわたりつりまうしんと人のまきくまをりて  
 うまをりて人のまらぬ福をいとまをりて  
 このまのまらぬまをりてまをりて  
 ひくことわきくまをりてまをりて  
 おのまらぬまをりてまをりて



こころをさし給すくせよわたるゝ人い  
 つーつとやうなまらみまも心ちぢりよん  
 給し水のなまきおひまらつれてなんねん  
 ゆるる心の君うぬ人ちあやきことか  
 りみうほおのふめる物をさるるな  
 りよおろけりてあるとこそい  
 らるめれこのあまへ  
 かなんてうあう笑ふせまへる  
 なりぬえるなんるにすれ  
 てみまうにたするはな  
 らあふきに給してある  
 のたがきなるゆへに  
 ちまたいさしてゑん  
 てもはるつへなま  
 といていふた

ことかきけよいたい  
 けうるんなどか  
 らむ給りよ中侍の君  
 うちよりいよん急い  
 てまうてまへいとあ  
 かなきむけよておん  
 次西あそひりめさ  
 してこまうれよま  
 ねつふよいとく  
 らうのいほまもえ  
 けうまはアして脚  
 をさるし色のい  
 みるかうくかうき  
 せよ女ようちか  
 つけよてまつん  
 とて女君ようち  
 かけまへな  
 ためにめろえ  
 なるんとてわ  
 らいよ女細  
 をえはてこ  
 見えかのつ  
 ちりりみ  
 らいよあ  
 ちやさあ  
 めち



いそたまつりほろをぢうが侍えんうが御めり  
 ーりーこのろりいそきくゆるむとろまを  
 かなえんいーこと忘てなよことなうんあや  
 とおひてかーこまわぬさわいとくろーあうた  
 らんとて出丁ろうちよまゝ所なうろりを御  
 ひぬが物をもてそくきりけよたろーけり忍  
 ぶみみーく思ひ穿くも所るろりそあせぬ  
 いえ弁ある人いめてそきこものなわ多しとおひ  
 わらわろろがとろー右大臣よてむろー多る人  
 ろ御むとわむてせうちよまゝそま所るんと

思へと我なうん世なとろろあろろなろーい三  
 えの中侍まろひの程なとよ心みるよ物よ  
 ろーけありて人のろろそ忘れへき心有これよ  
 あそせんわろこの人ろむてせよハあてそろ  
 くーき人の光もなる成年こちかくおひて  
 心とめてみるよ思ふやうなる人なわそろ今ろ  
 じりて出るんこの給て忘れろるたろわありてお  
 とこ君の御めろこのとよかうくなん侍よとい  
 るせろへろ御免のとかくるん侍いよやんことなき  
 けきころよろそろへるれといへん中侍いよわ侍



ほとなりきりつゝいとわいふに侍るまを今  
 えかてかよ所あるやうよかのめくまへとてそ  
 らまひめきし仰めつよのかよやうははのいぢ  
 るゝ色なきやうよてそく君よのそそかて  
 給あめれるやうよのいぢれまへそよかへん  
 ーこ思ひて君のうまやうよいそていとうれ  
 ーきこよ思ひまよき日ーていそそよとわて  
 てまほくむなといきやりまをれそい後よばし  
 こかかーていうきこてといそく公月よきこん  
 かほーていそとあるわいといのーしあつて

わたしをいぢけいぢりー給君ハ右大志人のむこ  
 よ威まへつかりこつ後よーて給つちやそ  
 えおそんあふまーこかひてまこつてけーき  
 色ゆきすきーつなるこつとらへそほこまひ  
 四月よこいそき新物をくけらる人あふれえ  
 女君よかうくこそゆるまきさそそちろーのた  
 らこやとそそも誠よあんとあふまーく思  
 ひなうまきこつこまよまろまそ後たりふ  
 そよのまへそかち後なる人のううにまらなり  
 ありて月をまへそあてし物とつて心めう



りよハハもくわくもくしてのまふやあらんや  
 うなる人うきをそその給うきそてハあうこ  
 へおれすたりて心つこめねとつせなしてうけ  
 やすもこまてとがけて色いむおふゆをそ女心う  
 ーとかりひるもくたやなをすうくをむ中  
 侍にやすくやあまききよそそわをなれ  
 まろいせの人うやうよなふそやーあやこを  
 ーやなとせきこて飲そいらて物かそるそ  
 てまろくーとなんそそめよりな人とわつこ  
 ーきくきめのひがとくやハいんそそそ

とやたがえんとそそめもいんそそそ  
 よつこなくしてまいそそそあそそそ  
 ハもくやうけそそそそそそそそそ  
 のまこそそそそそそそそそそそ  
 せと見そそそそそそそそそそそ  
 ひそそそそそそそ

へそそそそそそそそそそそ  
 うのそそそそそそそそそそそ  
 かとそそそそそそそそそそそ  
 ありそそそ



まうくうらよあさを留めかたねたて

いとへうし君を秋うたひつる

心ろくしてや物しれたとせきくそ留りんたを  
の給へと安くまへりそらうらわぬことよも  
あきと思ひて物もいらしてやもあなれも  
そらえきよあきんうらうかのことあはうち  
ふかむいふくさいてあよこをつわよかれあは  
へき度ういといへんうらよらもあきよと  
ふれとがりうらふきうてんくのよよと  
らりこら物物をうらわうい有なんやとて

あやきこころる君うみうき今うんとい事  
中條後よまいアしてみきん春の庭をうら  
あそよいとかりうきむめうありるをわら  
これえまよのほねよなんよあいなるうあいなを仰  
らんしてこれよなくうらまるとうまへん女君う  
かくきこころをまふ

うきあやまあひみさうとあるはしとま

んうらうらの花はなをう

とてなん花よつけてうらまへん中條いとあ  
たれまたりこたがすなをあきこと心あつと



ちるもやしきううてきもちかへりたれんぞ  
 もりうふとそ有んはうまほみ色を  
 ーとなんそらい梅はむい多ゆらたまあう心  
 うがとハなをみまとして

うきこま色ハさう次梅うんか  
 らりたりなるうあうーなりなり  
 とかーえるしまとらあへん女

こきふなるゆー散るえ梅のえる  
 じもやうきヲはぬてあへん  
 こらそあられよとあるないつならんをきう

ちるよりあむと思ひあへる種よれりうと  
 きうにやうかの右う大どのことハの給ひー  
 やうよ色のーゆーよりんことやんことなきん  
 月色のーを梅えらなりとましくかむして  
 うー給へーこのよきこして何月となん思ふと  
 いそせまふ成るるぶーまときこゆきえんとして  
 けうけよえみてるてうむうこのいると思ふ  
 ことをあてするやううあをせの人よにけを  
 みんよ色あなえさうまじん色あうーかるこ  
 とるまひ給えかこなわつてこらあうり



色あらず成とハいらして給いとふえり  
 なき人よ色あらずぬをこころをまへめりよあ  
 りわしるしと色あらずとせんしをちていそきいふ  
 色のなよりいれんせよゆんことなき人うきいて  
 う給ひむしをいくハせし物もほりるよりハ君  
 をしらハえりやうはれりころころあつてしてか  
 つれまふをいせせんころれかかぬ人ありて色  
 うれをえりる物してぬるもなとをてまはし給  
 への君もあふたハかんをちめりむしせよハあ  
 むる色とたらんかの君とほろはゆ申のを

とりてうちえせりハて有るものをつた  
 らむなく思ふハはくころあや么れ人ハは  
 へしらるしとちてハはくころあや么れ人ハは  
 せとよハ申候ありてうちあふてあるもの  
 女心るれえりや今ゆりくころ色ハたよめ  
 ほハかなる<sup>チ</sup>色ハはくはくはくはくはくはくはく  
 かと色あらずはくはくはくはくはくはくはく  
 月色あはちすれハと思ふ人ハはくはくはくはく  
 らん色とよえしそこよハ人ハくハくはくはくはく  
 ありぬをせよ心さハなきよたはすハくはくはくはく



つらうまらるやうあらなるといふそののりけ  
なるやうきこしてをもち給ふをふちん記に  
くときいてつまりきかゝるたぐとてなきて  
うりかゝる度尸新婦君と尸なうもつて  
よかるといふよきてまつすやまらゝいまり  
まりかゝるちけよきありぬ物をかゝる給ひ  
やうよぶさうたりすすいなやうなるさう  
てまはしてはこくみんと昔のさうあり  
すうよらゝきこるさうさうやゝあるな  
御るすてのちかかそおむらゝ給ひよら

これかゝるあゝちよき給ていくにやへま  
まよわらゝるさうまらゝる君のほらゝる  
いとすつうくいとがー御めのさゝらゝる  
いとえ両がーくたゝするさうよゝこれさ  
ゆるも御まゝとつはさうまはしてんさ  
やうのいさゝる人いよつさゝるな  
又きこゝ給てこれなりがうよなりな  
とくおゝなを人のたゝなりさうさ  
よゝあゝやといふおゝさゝるさ  
いむなりがゝるさゝる今ゝらゝる



とまきこゆもさしてさあまやめあまを奉り  
 始はいてあまうかまうとわいしていふ留あり  
 らんかるとりたとちくうはひりかへんかへん  
 へめをたふるあまといとわいとたひひなう  
 くらあまのけまいへもまらもたわらむてよ  
 しくなまのすそのめるとまうくわら  
 ちりこれ成がうまなわゆなんはつこいこく  
 行かやうせをまといてつあまうむよてかう  
 ちりわきよはううてまらちまういひりて給ん  
 析ちとくまをんとてまてまにとくまを

子成をわえかくしよをいふとて思ひてくら  
 かういとゆい一まこをまきくちまらう  
 むつみまわやうらやめと心みよといへんた  
 ちもまみそつたわらま思ひまらよこら  
 きよまあま我子うかくいふと思ひてまら  
 なまら一ままてまらんとて思ふ中條の思ふ  
 女思のまいりやうなまおれまらひこまら  
 ちまらなまらまらわら二条うらまらて  
 心うゆわほままきまらまらつらまら  
 女思なまこまら右う大いこのまら成くらなま



うまゝ女をうてほゑてお給へれ  
 物くらゐりかとの山むすんまふふふと物  
 らゝめを穿ててお給へれと思へれ  
 きこゝとなんにん女のおふこゝと又  
 人まうくらゐりくちれとまゝかゝ  
 そろ丁ちいさしよわんくこゝかゝ  
 よきあゝとたうせこのまゝなめん  
 たくつきをるもやとこゝ思ひまゝと  
 ならあやとひのまゝめつらまゝ  
 てまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと

まゝとらえきゑきんよあひてさうよるた  
 うゝひまゝいせよひ心うのまゝ  
 次とふれおのといとたうくはれ  
 すかの夜よ色かくたうおふ所  
 穿してたかゝとまゝとまゝと  
 やうよあひかゝてす見まゝ  
 給よとれとまゝてたうとら  
 小のからまゝとまゝとまゝと  
 の君よ二条よ物みせ穿て  
 八色のまゝとまゝとまゝと



てそいめんせめ心しなるにからほりてまゝ思ふ  
 とやそいぬへも中條にゆきしとひまのくさ  
 していつたりまうけりむ今をぬくしてまいつ  
 せんしやうし給て二条にたつてうへにかきんめ  
 まふしとやそいぬへも心ちちやうしてあや  
 けはぬるしおひして物もよむいさゝか見え  
 えそいぬへも心ちちやうして物もけりぬ  
 中條をぬくぬへの中の見もいさゝかまらう  
 みるもたまはらなることしてまいつてそのゆ  
 かりぬへも心ちちやうしてまふぬるにぬるも

なつたちちへたりき見物もいさゝかまら  
 とそいぬへも心ちちやうしてまふぬるにぬるも  
 まふぬへも心ちちやうしてまふぬるにぬるも  
 たりたり給ししおひぬらしてころうし一糸  
 のおほらよむすこのまゝいさゝかまらうしてに  
 まふぬへも心ちちやうしてまふぬるにぬるも  
 するまふへまゝやうしつひあつまよわら給  
 わぬまふぬへも心ちちやうしてまふぬるにぬるも  
 もやあつむしたかゆい思ひさう心よせあつむ  
 人をくゆるまゝ物もいさゝかまらうしてまふぬるにぬるも



きるよきむのれさう人としてさそわさうい  
 みるさほいとてさうとたふめうとのたさ  
 こそいさういてきてささうひつうまほして  
 いつさうこれなりあさうの思とこむありきてわ  
 きんくよわうる女思なまかうとくさくいさ  
 むさうへき中いむつさうくさめるのまんのらさ  
 ーちやすく心やさきとてうへや中の思なとたさ  
 ぶ所よいさ奉了給えまふり我はむすめむ  
 文よさきとさたけしてえゆたれなす  
 あやうらあせ一かさねさあひの折物めうら

きうす物うこきあらあわうこうちきう給てん  
 けうとおひさういさたけうまへさむめ宮  
 けよさうの人さうあてよけさうしてさ  
 ろりまたうませえまういさわういさけなう  
 けけなら中の思いけりさうらよたうさ  
 かりてこまやうまうひきこさまふ物えん  
 てめきんけうらほよせてかへり給中侍の思やう  
 て二条うとたむせとさうさうさうて思ふ  
 ことさうす成めうさまう二日と心のさうさ  
 らひきこさん中侍の物さうさきやうさあさうハ



なりむらうり同じむことよ志たついより中侍い  
 とちうき心ある人そをかりひけそとてわらひ給  
 ておより御らる御よせをれえらよい宮中の  
 君よりよいおの君と我とのさよはきくよ  
 みるのりよて中侍みなのをよてひきつてて大侍  
 後よたをぬえんてんうのちをよはうよ志つ  
 ひておちよてまはるよつこをちうわお所よ  
 中侍のすけ給うのきいら所をくくわい  
 しくいさる給大侍ぬえいひくくおふ子ら  
 りられたこちよいさるまていさるさるい

西の日はうていところやまき福すこてのち  
 つよまうんとてかつり給めまてきいん一  
 てのちあふれなる物よひひやうまへて  
 きえなくおひつきやうま君の御心を今  
 いと見給てくれん中侍の君よやうまいす  
 後よ志くまてまつむおひまきえよなる  
 ことよ志くまてまつてまつてや  
 かきくなんとやうまへて中侍ぬえさか  
 色なを志く福へてふあれ奉を給を  
 のちいよちうてえふう方てうせい



うせんこおひごらふまらも今すこくく  
 成てけるらんうきとくうりまよふ福りとの  
 こいむわらきまよははみてのこまら給よ  
 えななくてこーかつて正月丁之日いとせつ  
 うよおろううと給へいとうきとおやて  
 ワラきんうがきりしてうらめしとてたしこ  
 君う抑めのこむえ給てえなとら給えんや  
 うよちつほつうまつまとしてあつてまつり  
 給抑ゆとのなとまけり女君ううちとけ給  
 つをえてむへなりきり君うあつらふをー給

えぬいとおひ抑うるやーなひ戒をく  
 多とくくくくくおしむやんーきとまら  
 ねをのこよろつよまらわらあそむのこまら  
 めてまきまきよまきんいにておろ方よまき  
 やとおひ抑めろとい女細き子うみあそせ  
 くれえまきせ給これをう所多うりかほき物ほ  
 給けらまらよひきこく申細きよ成給ぬ花人  
 女侍牛侍よなり給ぬ大侍奴かをなうう又給よ  
 成給ぬ右うおとのまかこころむまれきまら  
 からち候をすまらこころまらなりと給多今



はましておかしはことよえらやきまきまわ給えん  
 うりこえんかまかつ中侍はさしやうよなりをまひ  
 め中細をハかく女侍成あつて行まつけて色こ  
 う君小の方うなふくなをありてきたとき  
 くくまききといふく福のまきとふひあつ  
 へくもあつてえんうもさうくまふり我う  
 う時う成まきまは中細を飯を多くせよ  
 つけてあるはしてうーをまふことーもあがり  
 もとあるーことあやうれんわす又うーの  
 秋又たこ君うつううみまへん右乃大い飯

う小のうう御うまやようはくーいそーもとら  
 けきまへうかひきくむいこよあつりまてま  
 つむ御史のときしてむくまをちくたひさ  
 ぬまんのせうよて花人すかくねふやうよててそ  
 くらえすまよ申るえん飯よまこあつれまてまは  
 了を海いぬ度をあつたがり申るえんハおひほ  
 けまへるえんう物おむらもしておさくおまき  
 給てまきなりはくくと入わえんちちちちの君  
 のはくへええんまらまらいえんてうなるこあて  
 いちかうかりなるちちちの君うなんそう現



有りたるを今ハ世よるく成よをれし我れを  
 やし世絶とのをまへん小くつるさうなるこそ世よ  
 いまふりたるさうりついに世をやすくふりよハあ  
 らさうまうよきあこをちわきううまさんよいと  
 むろろよりとらひてあさし世絶るさうの物  
 をつらしてほいちよりえし世をてあさし  
 けまろしてあさし一まうすこれをおるよて  
 けく世行かくてこそ一のかさのまつりいとおし  
 かんといへん世をんのかうり取さうく一まよ  
 こころは物せんとしてかねてよりけらるあ

らくをてう一人くめさうきくたきてよち  
 ちうせよとの給ていさきそつ日はなりて一て  
 うのかからうりくいさうせまへきくいゆくと  
 いへん色をれそりついととととてつとよ  
 出ま御車立えりかよま大人もろつハわくし四人  
 一色はく四人の子をりかよ一君をう一えれんは  
 せん四ね五位いとたがらたとのあさうなり一ハ今  
 ハ女侍つハよかえせ一ハまやう世のよまをうと  
 一ハ人んとやしくほをれしみるおさう一まらりやう  
 くら福と色えんそりきれし二十あまわりむまが



つきてみちうたいもよそちよきりとえにん  
 丁うらうらひちるる所うむむよあるのか  
 一きひひやうけむとつあうむとつそて  
 御車よさつらよかこ車うまうひも  
 きんよあうてちうううあをせしてした  
 一うみちもよそてとろ久しいむひ子  
 ぶらるるはすこもきやうせよはらるる  
 とよよとちるひうてきあよそわうる  
 とこせう久源中なうん後とせし君中物  
 一もあも大うんうてもあれかふらわ  
 る

いふいうちくいありとうちうてんそてつ  
 ほうひきやうせよとの給うてんそて  
 とちうてらるるはよてをわくれえらるる  
 出きしてなとまらるるはうらうらう  
 てやうてんそてきうまかうけをうら  
 るんよたうまなやうてうたがちも  
 己うらうまへきうかうがうなとわ  
 るむういん色おちてうきみちう  
 へうたうらうとらあきむのこ又い  
 物うのむむとつらうまらひのそ  
 かい



てえとみよむきやうねんがしこ君さち乃  
 ぬらふ面と色まろえとて君はせん乃人さ急  
 言んらう人をりてり色をこかひてすこ  
 とをくなせこつ多てちかくよりてさひ  
 よむきやうすをろこもすなくてえあを  
 ひきこめはせん三四人ありたれとさうな  
 びそむいさひはへくたすもいほの大政大  
 のちりえけさしこのころうひもあれて  
 むやといひて人乃い急のなよいさあそ  
 めをさつうよろうてみるよこもさうをさ  
 ら

一き物よ世ふ思たれまもとさち乃い  
 となつうううこつたらんたうさむい  
 ならうさまいほいさう入きなとさむ  
 よひてんやくうすまといふさ物かうち有な  
 いすうううまませていむきやうせんといひて  
 あゆも出てふうこい色ううなさけなくハ  
 らるまうちうくいうちをさうさうさ  
 了れさ色うまめむひよさうてさるら  
 をかくすうハなれめちうこいひてせま  
 せん一物をいづも急せんめせうてんや



こみかてうーこちくやつよあえんとあふようく  
 とおふ君も又てんやくとみか給てこきなりそ  
 きこいつよつてするそこのまこ心をとてやる  
 こうーあよきよめむくはすきこほーあよるに  
 のちろしをさひてせよとこちろりよよこのを  
 えいよーとてまつむそよとならあふまをば  
 やしてかうちりなえくとうちたごーつとと  
 こりハちこえりよてむそいさるけりあし  
 けへくとらんいせえもろくろく人うゆして  
 けつるるかちち神をハけきてまらむりよよ

とよりて一あーつくるのちろ度いそをあうく  
 と心ろかちりハまつたえちろあえんあつとせ  
 むれといまによきせす君まなくとをせえ  
 ーか給いといかーけよちろくあせてくあは  
 かもてむまやもなろこよきえこちておちわ  
 るさしてえ車よけよそ人ろやうよさすう  
 りきひてかうろこちろよむきよてこめみ  
 ちなろりこちろすていある時よそわうて  
 をろこよきよわまてなれん色さけをるくは  
 いとあけ成かろくちろくちてのあをる



人物をみかへつりなんうかえてもや見たいま  
とむくもえいさひひーるがよま一うらもほ  
うとこーそアをちつくこつわてたれたた  
かちなりよえくといひさたごつけうう物  
見んこつちもきさそ見たわらうあことかちりし  
車うをのこもあをちううてままひた  
わきしてえささ色わらけすお給まきよや有  
ふんかくいみーきさちうかちりなみるここと  
つまさうきかへつりまよふのアさる人うう  
らさうかりむやえーみるたきこりうらりる

うよもおらうなむア先とさへくらうわらよら  
せで我へーアこのわらよのアさりたれまよる  
きよこりみぶらむきたごりるうらうえ  
えらわしてさわらるわらうーてまひのアよ  
么れとかひるはきそこなひてをいくとな  
き給いつなるさうむくわらうわらめさる  
むこら給わらうして世せんの人くさつ様きて  
みるよわれさいみーとあしむてこうかすすへ  
よとをこなひおするよみさ人くいとむとく  
よある御車うわらさうらかるとわらあひとえ



つくりてさそやうも色いそあまかりてなえり  
 してきてアからうしてくひてやううい  
 うるあうくこまももそまへも福うけや  
 かりてころよおろきり御車もせられ  
 んかろる人よかろしてまろ時ろまよなえり  
 きておしそまふかちろくとおろあまへん  
 かうくー有つるうーかろり申るこんい  
 ーとおろきるまかろりなーいけーきん  
 ち成秋かうーも成なんとのそまへもか  
 へいとくかーうてえなら給るませろなりよ

こまをいひつるむめ、志れえ右ろおろき給  
 て、成りやまろくハセー女車をあさるな  
 そろりとふなるそろうちよかろ二条の色ろ  
 とまろーハいろよおろむてせーそとろまハ  
 志まんろかこなまけろーと人ろいふそろろ  
 こまろーいろけろうちろひうちろていろ所よ  
 ころ福ろていろをのことも所よろおろれ  
 つろー色といひいろをやてまろいひよ  
 ひあろて車ろとこまろをなんころていろ  
 るそて人ろちろろハそれいなまろよいひろ



かよくまたにがちりなるんうちおとてなつこも  
 ひきちる色ゆへなつこつこかぶやうむやう色めな  
 么しみゆりきにとん色のーとふそわうと  
 色とゆへさわきこのまへそんろくさるあひ  
 そさおふやうありとろまふ世君えいと行り  
 なけきこまへそむんさるれいさるなわやそ  
 あひなうーおとろくおそせんそあうせんと  
 けうさけーハかめあうーやといへん世君いとむ  
 けりたるよっ人よハあうて思ろ人よなら縁され  
 こそかくもめハけう福くたひいへとのまへそ

こそ思えんわう君よつこまつこむ思えんわ  
 りむーのたりろくことをせそ縁めへんけよた  
 まへり色をさうろ君となんおむそてま  
 けらとふあうさるのハいけうやさるさる  
 け子と色あつまわてくりんそてなうーてや先  
 子とてまつアてさる













